

東アジア共通のナラティブを求めて

きむ

日本に来て、数えて19年目になろうとしている。関西、北陸での7年間をへて東京にきて12年目を迎えた。1994年の夏休みに仙台で短期留学をしたことがあるが、長期留学は1996年以降である。当時滋賀県で留学していた僕にとって、里帰りは大変な出来事かつイベントであった。朝早く起きて1時間ほどかけて京都に着き、京都から関西空港まで特急電車、関西空港からソウル金浦空港へ、また金浦空港から江南高速バスターミナルへ（海辺にある僕の故郷には鉄道が通らず、長距離はいつも高速バスを使う）、江南から3時間以上かけて田舎の邑のターミナルへ、ターミナルから2時間おきのバスに乗ってやっとの思いで帰宅できた。本などの手荷物も多く、往来した翌日はいつも筋肉痛で苦しんだ。北陸でも大変だった。地元の空港は週3日しか韓国への出航便がなく、雪の多い冬には欠航も度々あった。幸いに北陸では留学ではなく働いていたので大量の本を運ぶことはなくなり、筋肉痛も緩和された。それに比べれば、近年は羽田から金浦空港へ、空港のリムジンバスで地元の近くまで行ける。日本以上の車社会である韓国は、田舎では誰でも車を持っているので、兄弟や友人に連絡して自宅までスムーズに行ける。30代に至るまでは田舎への里帰りが苦であったが、40代の今は田舎に生まれてよかったと思っている。

前置きが長くなったが、日本に来てから韓国に帰るのは年に1回、2回ほどのイベントであった僕は、昨年度から月1回ほど韓国に帰っている。研究調査または学会発表などで3泊、4泊ほどの短い滞在であり、半分以上は首都圏（ソウル周辺）に泊まる。夏休み・冬休みには1か月ほど滞在することもある。2017年に入っても3月までに4回韓国に行ってきた。ここではとくに3月の国際シンポジウム「近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播」（延世大学校言語情報研究院HK事業団主催）の内容とその感想を述べたい。HKはHumanities Korea（人文韓国）支援事業で、日本の学術振興会の科学研究費助成事業にあたる韓国研究財団支援事業で、一つのテーマを10年間にわたって研究する。

国際シンポジウム「近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播」は、言語情報研究院の開催で言語学中心の研究会であったが、東アジア文化交流というテーマに相応しく口承文芸という枠も設けられたわけである。漢字文化圏近代語研究会との共同主催で2日間にわたって30人ほどの日中韓の発表者が一堂に会して議論を行った。まさに国

目次

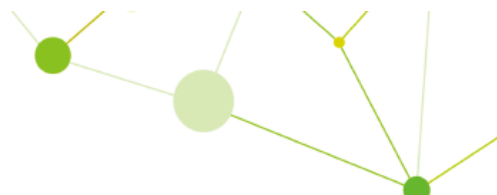
東アジア共通のナラティブを求めて・・・	1
明治大学平和教育登戸研究所を訪ねて・・・	5
書評『思春期になった子どもたちの自分探し』・・・	7
短信・・・	8

際シンポジウムという名に相応しいよく準備された意義のある研究会であった。僕は初日「コミュニケーションの多面性と複合知識」の第3テーマ「語りと暮らし」で発表した。発表内容は予稿集『2017 国際シンポジウム 近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』に詳しいが、その内容と自分の意見をまとめてみたい。

一般に口承文芸（韓国では口碑文学という用語を使う）とは文字ではなく、口伝のみで語り継がれる形態（口承）の文学（文芸）をいう。しかし、近代国民国家以降における私たちの口承の営みと暮らしは、大きく変化している。近代国民教育、マスメディア、活字などの普及によって日本と韓国の人々の暮らしは激変している。口承はもはや一面的なものではなく、書物などを媒介したメディアの直接・間接的な影響を無視できない。大事なのは口承を絶対化するのではなく、口承を相対化してその多様性を自覚し、それに穿鑿しなければならないと、僕は日々努力している。そこで僕は、口承の近代文化史を明らかにする作業を多年にわたって研究し、その重要性を認識している。

2017 국제심포지엄
2017 國際シンポジウム
『近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』


연세대학교
305 701



2017 국제심포지엄
“근대 동아시아의 언어 접촉과 교류 전파”
2017 國際シンポジウム
『近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』

일시 : 2017년 3월 24일(금) ~ 25일(토)
장소 : 연세대학교 백양누리 헬리녹스홀, 광정환홀

주최 : 연세대학교 언어정보연구원 HK사업단, 漢字文化圈近代語研究会
후원 : 한국연구재단



予稿集『2017 國際シンポジウム 近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』の表紙

韓国でも日本でも口承の絶対性（たとえば、実証もなくただ書物より口承の重要性を無条件に肯定・神話化する）に固執する口承文芸（口碑文学）研究者が少なくない。第3テーマ「語りと暮らし」では、韓国、朝鮮民主主義人民共和国、日本、中国の4地域の口承文芸の現況を話し合った。東アジアにおける「語りと暮らし」を企画した金吟希（きむ・よんひ）先生は、語りのテキストのみならず、パフォーマンスをめぐる多様性に注目してきた研究者である。韓国で口碑文

学は、一般に韓国文学（とくに古典文学）の一分科化している。僕は民俗学の立場から口承文芸を考察しており、近年の韓国における研究傾向については常に違和感を抱き、時に批判的な論文を発表している。韓国文学の側面から口承文芸にアプローチする韓国において、民俗学理論とパフォーマンス理論を駆使して、多年にわたりフィールドワークを重ねてきた金聆希先生の研究成果は注目に値する。

金聆希先生の発題は「口述記憶と叙事的表象—密陽送電塔建設反対運動の参加者たちの口述叙事を中心として—」であった。密陽送電塔建設反対運動は、韓国電力公社（韓電）が地元の人々の意思を無視して強行に推進した高圧線と 765kV 送電塔建設に対抗して、2005 年から 2017 年にわたって持続した激しい市民主導の社会運動である。韓国電力側が住民（反対派と賛成派）間の葛藤をもたらす手法を使って、村では賛成派（バックには韓電がある）による訴訟が相次いだが、それでも多くの高齢者（とくにハルモニ（おばあさん））が最後まで闘ったものの、公権力をつかって建設を押し切った。現在送電塔は完成されているが、12 年間の闘いの中で、電力の技術的な変化もあり、765kV 送電塔は今日それほど意味はなくなり、試験運用だけを行っている状況である。

金聆希先生は、1999 年から 4 年間にわたって慶尚南道密陽（みりゃん）をフィールドワークされた。その後も密陽に関心を持ち続け、2014 年以来学部生の現地調査などを続けて実施している。マイケル・ホワイト（ナラティブ・セラピー）は「生きたまを語るのではなく、語ったまを生きる」と述べている。つまり、経験を解釈する（語る）行為は、理解するための枠組みを供給している解釈の供給源によって変わりうるのである。いうまでもなく、個人的な記憶は社会的文化的に構成される。山小屋で韓電（公権力）と闘ったハルモニたちは、長い闘いの中で都市労働者の気持ちを徐々に理解し始め、表現する「声」を持つことになる。また、決して平穏ではなかったはずの 12 年間の記憶（語り）は、「家族」（一緒に闘ってくれる外部の連帯者・支援者）との楽しい「思い出（ナムル、山菜、花チヂミなどの食べ物、歌、砧）」として表象される。社会的対立の場が「家」として表象されて、抵抗運動の中で出会った連帯者との関係は、「家族」という形で具現化されるのである。密陽の運動は、口述記録集『密陽に生きる（밀양에 살다）』『白書』、絵本「密陽ハルモニ（밀양 큰할매）」をはじめ、ドキュメンタリー映画「密陽アリラン」「楽しい我が家（즐거운 나의 집）」でも公開されている。

ハルモニたちの発話には、闘い、連帯、孤立、喪失、憤怒、誇りなどの情緒と感情に溢れている。金聆希先生は、何が起こったのか（ファクト）ではなく、苦痛と悲しみの感情を理解して何を語っているかに注目する。また、何を語るべきかを問う作業を求める。それはまさに口述記憶の社会政治的効果を探る実践的な作業にほかならないと、僕は理解した。

次に、キム・ジョンゲン先生は「脱北青少年の口述に現れた‘ママ（엄마）’の解体」という非常に興味深い発題を行った。南北統一学研究で知られる建国大学校人文学研究院所属のキム・ジョンゲン先生は、韓半島全体をフィールドにして南北口承文芸を研究する数少ない研究者である。「脱北民（탈북민）」の口承も広く調査研究し、その中で昔話に留まらず、脱北者の経験譚・生涯譚を収集し、多くの著作を出している。2000 年頃まで毎年の脱北民は 1 千人（1998 年までの女性の比率は 12%）を超えなかったが、2001 年には 1 千人（女性の比率は 46%）を超え、2006 年には 2 千人（女性の比率は 75%）を超えた。しかし、2012 年からは再び 1 千人代で推移している。脱北民は韓国での暮らしが思いどおりに行かないことを認識し、渡韓が減っているのである。しかし、この十年間にわたり、女性の比率は 71 から 80%を維持している。つまり、近年の脱北民は、女性の比率が圧倒的に多い。食堂や清掃、サービス業に従事する脱北民が多いので、男性は韓国に来て生活は大変で、主に女性が来て北に仕送りをしているわけである。キム・ジョンゲン先生は、脱北 1 世代を生計型、2 世代は北の子供を連れてくる救助型に分けている。多様なケ

제3주제 : 이야기와 삶
장소 : 백양누리 객정환홀

시 간	발표제목
14:00~14:30	구술 기억과 서사적 표상 - 밀양 송전탑 건설 반대 운동 참여자들의 구술 서사를 중심으로
14:30~15:00	탈북청소년 구술에 나타난 '엄마'의 해체
15:00~15:10	휴식
15:10~15:40	최근 일본의 이야기 구술 조사 연구 - 동일본대지진 재해를 '전승' 하는 의미
15:40~16:10	위기의 중국 조선어 방언 자료 수집 및 연구
16:10~16:40	토론

폐 회

第3テーマ「語りと暮らし」の次第

스튜디오 대상이 있는가,よくあるパターンは次のように図式化できる。ママ(母)が先に生計型脱北をして北に仕送りをする。北に残ったパパ(父)はそのお金で再婚し、子どもは継母とうまくいかない。ママが子供を連れて来て脱北青少年の進路がうまくいくケースもあるが、パパは再婚、ママは愛人がいて、悩み続け、家出をするケースも少なくないそうだ。キム・ジョングン先生は、脱北青少年の口述を綿密に分析して、ママをめぐる言説にはママの「破壊」ではなく、「解体」を見出せると診断する。脱北青少年は家族の解体に直面し、ママを嫌ったり憎んだりするものの、やがてはそのママの暮らしと生を許し、理解しようとする。青少年たちは「あの時は仕方がなかったから(그때는 어쩔 수 없었잖아요.)」と語っており、そこから母の解体を読み取る。

日本でも韓国でも報道だけでは、脱北民、ひいては脱北青少年の日常と苦悩はなかなか伝わってこない。キム・ジョングン先生は脱北青少年たちが資本主義社会に直面し、戸惑い、彷徨い、やがては自立していく姿を読み取り、新たな「母系中心の家族」の誕生を読み取る。脱北民3万人時代の韓国では、政治経済の研究だけではなく、口承文芸の研究においてもこの問題に真摯に向き合っているのである。

3番目の発題を担った僕は、「東日本大震災、災害を語り継ぐ意味」という副題で、3.11以降の日本口承文芸学の対応と現況を報告した。とくに日本民話の会、日本口承文芸学会の対応を検討してから、東京学芸大学石井正己教授の取り組みを詳細に報告した。石井先生は、日本と韓国の民俗学・口承文芸学者が一堂に会する「日韓共同学会会議」を2015年以来継続されている。石井先生の編著『震災と語り』(三弥井書店、2012年)、『震災と民話：未来へ語り継ぐために』(同、2013年)は3.11以降を生きる人々の必読書である。

最後に、中国の李錦花先生(南京大学外国語大学韓国語文学科)は「中国における危機の朝鮮語資料の蒐集と研究」を発題した。李先生はソウル大学校で慶州地域語(方言)で修士論文を、平壤地域語で博士論文を提出し、『中国朝鮮語地域語テキスト叢書』(全13冊)を出された研究者である。李先生は長年にわたって平安道・咸鏡道地域語を研究していて、高齢のインフォーマントとの出会い、調査過程、音韻論研究過程を詳細に報告した。消え去りつつある地域語の継承と記録に対する情熱と熱意が伝わる報告であった。

第3テーマ「語りと暮らし」は、日中韓の口承文芸学の現況の一断面を提示し、それをめぐって真摯な討論が行われた。民衆の間で綿々と語り継がれる口承を研究する一方、現実世界の暮らしと日常についても熾烈に議論する東アジア口承文芸の未来を創造できる有意義な時間であった。

明治大学平和教育登戸研究所資料館を訪ねて

安藤

3月4日（土）午後、Yさん、Sさんと私で川崎市にある明治大学平和教育登戸研究所資料館見学会に参加しながら同資料館を訪ねた。この地は、多摩川を挟んで東京を見渡すことができる小高い丘陵上にあり、現在明治大学生田校舎として、理工学部と農学部の1～4年生と二つの学部の大学院が入っている。しかしここは日中戦争が始まった1937年以来敗戦まで陸軍登戸研究所として、アジア・太平洋戦争中には細菌や毒ガスなどの生物・化学兵器の基礎研究、風船爆弾の開発、中国国民党政府攪乱のために偽札の製造を行ったなど、戦争の暗部に深く関わった場所である。戦後一時慶應義塾大学の理系学部の仮校舎が置かれた後に、1950年に明治大が建物を含めこの土地を購入して先述の学部を置いている。そのためキャンパス内には現在でも登戸研究所時代の遺構やゆかりの物が点在している。ここまでならば、単なる戦争遺跡ということになるが、この登戸研究所に関しては、1980年代から周辺の住民や高校生が、その実態を調べて明らかにしてきた経緯があり、その事実を後世まで残そうという強い要望がおこり、大学側でもそれに応える形で、校舎建て替えの際に、研究所時代からの施設を修復・復元し、2010年資料館を開館した。現在ではこの資料館開館に尽力された文学部教授の山田朗館長と、元法政二高教諭で、高校生の登戸研究所の調査を指揮された渡辺先生という専門研究員が中心となって、研究、展示、教育活動を行っている。今回は月二回程度行っているキャンパスと資料館の見学会に参加させていただいた。

私は明治大出身であるが、理系専門の生田校舎を訪れたことは、数える程でありこの敷地の歴史的経緯についてもほとんど知らなかった。そういうわけで今回は、あらゆることが初体験であり、非常に期待が膨らんだ。

午後一時にキャンパス中央にある、その名も中央校舎という新しい建物の一階ロビーに集合した。この説明会是一回につき、25名を定員としているが、私たち3人を含めほぼその数の見学者がいることにまず驚いた。偶然にも見学会の二日前の朝日新聞夕刊に、この資料館や見学会のことが大きく取り上げられたことがあったかもしれないが、見学者はさまざまな年代の人々で関心の高さを感じる。本日の説明役の山田館長が円の中心に立ち、登戸研究所の経緯を簡単に話された後、別棟の資料館に行くまでの間に、キャンパス内をゆっくりとめぐりながら遺構を説明され、見学者一同がその後を追う形となる。

外に歩き出した一行は消火栓の前に来た。山田館長の話では、この種の消火栓は、キャンパス内にあと一カ所あるという。よく見ると消火栓の上に陸軍を示す☆のマークが刻まれている。これを見たときに私は去年の交流会のFWで訪れた旧海軍船橋送信所跡の標識（境界標）を思い出した。あの標識も、この消火栓もいまではひっそりと周りの風景に同化しているが、かつてここがどのような場所で、どのようなことが行われたかを見てきた物言わぬ証人なのである。

さらにすすむ。キャンパス入り口付近のヒマラヤスギの並木にやってきた。このヒマラヤスギは研究所時代からあり、今はない研究所の旧本館前に続く車寄せとロータリーの一部が名残を留めているという。山田館長のこのような説明を聞きながら、さらに入り口付近の大きな石碑の前にやってきた。この石碑は実験動物の飼養塔で石碑の裏には「登戸研究所之建」の銘が刻まれている。1943年建立というので、まさに登戸研究所がその「役割」を強め始めたころである。この研究所で生物・化学兵器の開発が行われ、実際に中国人捕虜による人体実験もおこなわれたという証言を知るときに、この石碑もまた戦争の残虐さを知る証人となる。ちなみに理系学部のキャ



ンパスということもあり、現在でも年一回ここで動物の慰霊祭が行われている

現在の学生はこの場所であつて行われたことについてどのように考えているのだろうか。

私達一行はまたキャンパス内を歩きながら、かつて偽札製造の部署であつた場所に来た。ここでは現在ユネスコ世界無形文化遺産に登録された埼玉県の細川和紙など全国の和紙の職人が呼び寄せられ、偽札のもとになる、精巧な紙を漉くことに協力させられていたという話に驚愕する。あらゆる技術が戦争遂行のために動員されていたのである。この事実は現在でも科学技術の軍事転用とそのための産・学・官の接近という問題につながってくる。資料館に到達する前に、すでにさまざまな問題が提起されているように思われる。

キャンパスを歩いた一行は、敷地の隅にある、小さな神社の前に来た。現在は生田神社というが、元々は「弥心神社」といい、登戸研究所時代に建立されていた。知恵の神をまつっていたが、登戸研究所がなくなると、一時廃されたが、その後「生田神社」として再建された。神社の施設は明治大学所有になっているが、管理は近くの神社庁の所管という山田館長の話である。この神社の境内には1988年に元研究所員らによる「登戸研究所跡」碑が建てられた。

先述のように、1980年代に高校生や市民の聞き取り調査に重く口を閉ざしていた、元研究所所員が証言をはじめた、その頃の建立である。句碑にある「すぎし日は この丘に立ち めぐり逢う」という言葉は、元所員の心情を表しているという。

この神社からさらにすすむと、大学校内から下がつてゆく道が分かれる。「この道を使って偽札を研究所から運び出した。」と山田館長が話をされた。何の変哲もないこの道もまた歴史の証人である。

生田神社を後にして、我々は学生が集う、部室センター前にきた。ここで山田館長は、このあたりで電波兵器の実験が行われたことを話した。山田館長の話をもとめると、もともと「く」号、「ち」号計画と当時呼ばれた電波兵器開発のために、条件の良いこの小高い丘に研究施設が作られた。それが登戸研究所であつた。それまではこの場所は「日本高等拓殖学校」と言って、移民の訓練所であつたという。研究の本来の目的であつた電波兵器による人体の殺傷は、結局実用には至らず、その技術が現在の電子レンジに生かされているという。まさか電子レンジも軍需技術の「民需転用」であつたかと驚く。部室センターの前にも、陸軍の印のある消火栓が残っており、この消火栓は学生がよく蹴っているという山田館長の話には苦笑するが、過去の、この事実さえ、現在の明治の理系学生のうち、どれ程の数が知っているのだろうか。

部室センター前からさらに進むと、小さな水槽の前で館長は、現在は小さく浅いこの水槽も研究所時代には深く大きかったことを説明する。さらに道を2度ほど曲がると、いよいよ資料館の建物が見えてくる。その前に研究所時代からの建物がそのまま残っている。通称「弾薬庫」と呼ばれているらしいが、実際は「薬品庫」ともいわれる。正面からはよくわからないが、コンクリート造りで、平屋の建物は、半地下状のようである。戦後も大学の倉庫として使用されていたようで、頑丈な構造のようだ。(前編終了)

(写真は <http://www.meiji.ac.jp/noborito/historical/index.html> より転載。2017.416 検索)

書評『思春期になった多文化の子どもたちの自分探し』

(ソソンヨン著、パンパス、2015)

佐藤

書店に平積みされたら、思わず手に取ってみたいくなる表紙の本である。黄色い表紙の真ん中に白いリュックサックがあり、そこに書名が書かれている。リュックサック下部の緑色部分には、副書名『多文化の青少年たちの心を慰め、長所を伸ばす現実的なメンタリング*』が書かれている。そして、表紙には色とりどりの国旗も描かれている。

著者ソソンヨン氏は安山（アンサン）元谷（ウォンゴク）小学校で、多文化家庭の子どもたちのための特別学級を受け持っている。安山市檀園区元谷洞一帯は 2009 年に「多文化特区」に指定され、外国人が多く住む地域である。

本書は著者が関わった多文化の子どもたちのことが、同じ思春期の子どもたちが読みやすいように話しことばで書かれている。いろいろな例が挙げられ、悩んでいるのは自分だけではない、と子どもたちに知らせ、子どもに寄り添った解決策も書いてある。

多文化のクラスには、両親のどちらかが外国人の子ども、両親とも外国人の子ども、外国で生まれて、突然韓国に来るようになった子ども、北朝鮮を脱北して来た子ども、在外同胞の子どもなどさまざまな境遇の子どもたちがいる。その子どもたちは韓国とは異なる文化で育ってきた。

肌の色をからかわれて傷つく子ども、韓国風の名前ではないと言われて悩む子ども、友だちからイスラム教だからテロリストだと言われる子ども、また、給食でも悩む子どもたちがいる。モンゴルから来た子どもは給食に出る魚が食べられないと、イスラム教の子どもは豚肉を食べられないと、それぞれ悩んでいる。

そうした時、著者は子どもたちに向けられる言葉の暴力をそのままにして我慢して生きていくのではない、隠れていてもいけない、間違った言葉と行動に対しては必ず謝ってもらわなければならない、と対処法を一緒に考える。食べられない給食がある時は、担任の先生に相談するように、もし母親が韓国語を話せない場合は、仲の良い生徒に頼むようにとアドバイスをする。

韓国人の母親の姓を受け継いで名乗っているが、父親は日本人の子どもは小学校の歴史の授業で日本のことが出ると、はらはらする気持ちで早く授業が終わらないかと思っていた。中学生になった今はそれほどではないが、独島（竹島）や慰安婦のニュースがあった日は、友だちがひそひそ話をしているように感じられる。同じクラスの子どもたちは言わないが、他のクラスの子どもたちから「あんたは、どっちの国の人なの？」、「誰が悪かったと思っているの？」と言われたりする。そうした時、著者は友だちが日本と彼を同一視しないように自分の考えを、勇気を出して言うことを勧める。

リストカットを繰り返す子ども、「死にたい」とノートいっぱいを書く子ども。著者は彼らが「死にたい」と言ってくれて良かったと述べている。そうしてくれたから先生と両親たちが彼らの悩みに気づくことができたのだと。

この自殺願望のある二人の話に続き、著者自身がガンを宣告され、「私がガンとは…。その宣告



は晴天の霹靂だった。死にたくなかった。」という気持ちと、手術したことが書かれている。

本書は韓国と同様に多くの多文化の子どもたちが暮らす日本でも大変参考になると思われるが、まだ日本語に翻訳されていない。是非、翻訳書が出版され、多文化教育に携わる方々の参考になればと思う。

※メンタリング：人材育成の手法の一つでメンターと呼ばれる経験豊かな年長者が、組織内の若年者や未熟練者と定期的・継続的に交流し、対話や助言によって本人の自発的な成長を支援すること。

日韓合同授業研究会・韓日合同教育研究会 洪城(ホンソン)交流会について

- ・日程 2017年8月4日(金)～8月7日(月)
- ・場所 忠清南道洪城(ホンソン)郡(フィールドワークではブルム(ふい)学校、韓龍雲生地等を訪ねます。)
- ・宿舎 青雲大学校寄宿舎
- ・環境教育、環境農業等を扱います。

短信

○3月10日、韓国の憲法裁判所は朴槿惠大統領の弾劾訴追を認める判断を下し、朴槿惠は大統領を失職しました。韓国のダイナミックな民主主義のうねりを見つつ、森友問題の現実を見ると何とも力至らないを感じざるをえません。しかも官房長官も文科相も教育勅語には良い点もあるなどと平然と述べているのは、「戦後」に対する明らかな挑戦です。教育の場でどのように跳ね返していけるのか、今私たちは大きな分岐点に立っています。

○『第22回潮来交流会 授業・交流会報告書』お求めください。日韓の高校生による交流報告、道徳教科化についての報告、韓国の国定歴史教科書問題に関する報告、ヘイトスピーチと関東大震災時の朝鮮人虐殺に関する授業実践報告等、とても充実した内容です。右記納入先に1,300円(送料込み)をお振込みください。

○池明観先生の新刊『韓国史からみた日本史—北東アジア市民の連帯のために—』(2017年、かんよう出版、1,500円+税)が出ました。4本の講演記録と1本の書き下ろしから構成されています。「(略)物心ついてから日本との関係の中で生きてきたということを今さらのように思いだします。「言語」からいっても、今でも韓国語よりは日本語のほうが書きやすく、あるいは日本語の本の方が読みやすいように習慣づけられており、二重言語のなかに生きてきた者の背負わなければならない道のような感じもしますが…(略)」という一節を読みつつ、植民地支配や戦後日韓関係の厳しさとは何であったかを改めて感じざるをえません。(E)

ウリ 108号 2017年4月23日

日韓合同授業研究会

事務局連絡先

E-mail larrabee1991@yahoo.co.jp